

会報

〒183-8534
 東京都府中市朝日町3-11-1
 東京外国語大学
 ロシア語渡辺研究室内
 東京外語ロシア会
 TEL&FAX 042-330-5265
 振替口座00110-8-22338

外語を去るにあたって

渡辺 雅司



あと半年で28年間の私の外語での教師生活も終わろうとしている。この会報が届く頃には、私の後任も決まっているはずである。なのに私には達成感とか、安堵感といったものがない。ライフワークも残したまま、未完成のまま外語を去ろうとしている。われながら外語で最も往生際の悪い教師だと痛感している。とまれ定年を通過点として、これまでの外語での生活を振り返ってみてみたい。

は迷った。当時奉職していた京都の同志社大学は、研究環境という点では、国立大学よりはるかにすぐれていた。第二言語学とはいえ、図書費は外語の十倍はあったし、講読、会話クラスまで自由に設け、非常勤講師は必要なだけ雇い入れることができ、全学から意欲のある学生が集まりだしていた。今をときめく作家の佐藤優などもその一人であった。しかも個人的には、同じくロシア文学を専攻する私の妻が、神戸市外国語大学の教授として教えだしたばかりだったから、単身赴任になることは目に見えていた。それと学生時代を振り返って、悪く言えば重箱の隅をほじくるような外語の教養風土(失礼! 少なくとも赴任前はそう思っていたのです)が私には重荷であった。語学が好きなのに、本来の研究がおろそかになることを内心恐れたのだ。そんなことを当時天理大学にいた亀山

外語を去るにあたって……………渡辺雅司 1
 追悼 新田實先生……………渡辺雅司 2
 外語の思い出……………貝沼一郎 3
 赴任にあたって……………沼野恭子 4
 ロシア・トルクメニスタン旅行記……………鈴木義一 5
 イギリス、ロシアに留学して……………門馬千尋 6
 初めての演劇『鼻』をつくる……………杉 香苗 7
 府中だより……………鈴木義一 07年ロシア会報告 8
 会計から……………二〇〇七年度会計報告……………9

現象長を週末になると、西大寺に呼び出し、ビールを痛飲しながらぼやいていた。

にもかかわらず、私は外語を選んだ。岐れ道にきたら、苦しいほうを選べという私の信念に従ったともいえるが、元来運命論者である私は、そこに運命じみたものを感じてしまったのだ。その頃の私はロシア思想史という専門から少しずれるが、外語のお雇い教師だったメーチニコフの研究に没頭しはじめていた。「ナロードニキと自由民権運動」などというテーマを設定し、旧外語の精神風土に探りを入れた。ところが、外語はメーチニコフによって活性化された。露語科の虚無党精神こそが日本近代の歪みを射るものだと直感したのだ。その外語は現一橋大学に吸収合併され、廃校の憂き目に遭った。私は外語と一橋に学んだから両校を、複眼的に見られる立場にあると一人合点したのであった。

こうして着任した外語だが、数回授業をしただけで、そんな迷いは吹き飛んだ。今でも鮮やかにおぼえているが、当時の一年生の打てば響く反応の良さあまりに感動した私は、そのことを

主任の原卓さんに報告した。すると「バカ、こんなこと20年ぶりだ」と原さん。ということは原さんの着任した年以來ということだ。その言葉に私は燃えた。そのときから、私は学生全員の名前をその筆跡とともにフルネームでおぼえることを自分に課した。授業中は学生全員の表情を見落とすまいとした。順番に当てるのでは、学生の参加意識は薄くなるので、目が合ったらあてるといった方法をとった。中にはうざったいと思った学生もいたかもしれないが、私はこの方法をとり続けた。また授業中は意識的に雑談をするようにした。その中でロシア文化、願わくばロシア思想史の面白さを感じてくれる学生が出てくればという魂胆もあった。語学の先に広がっているものに目を向けさせたかったのだ。実はこれは私がたどった道でもあったからだ。子育てをするとな人生を二度生きた気がするというのが、外語で初級の語学を教えるとな毎苦かったころの自分に戻れるのだった。そしてかつての東郷、石山、和久利といった先生方と同じ質問をしている自分を発見して、内心苦笑したものである。おかげで28年間、私はロシア語の授業で、快感こそもらったものの疲労感を感じたことはほとんどなかった。この点では外語の学生諸君に心からお礼を述べたい。

外語着任早々、九十年史編集委員にされ、その後10年以上百年史編集のため基礎的研究をたった一人でもかされ、その後中嶋雄雄学長の下で、全学を挙げての編集委員会が組織され、全

4巻の「東京外国語大学史」に結実したのだ。これも関連するが、毎年校も散りかけた頃、染井盞園の二葉亭四迷の墓に、新入生全員を連れて行くのが恒例となった。そこで明治時代の旧外語のナロードニキ精神をロシアの口の字も知らない学生諸君に熱く語るのだから、さぞかし面喰ったであろう。これは前任校の同志社が新島襄の墓に詣でる習慣を真似たのだったが、自分の学が外語という大学が、たまたま語学大学ではないという意識をそれこそ「外部注入」するためだった。外語の歴史を掘り下げれば掘り下げると、これまで知らなかった日本近代史の暗部があぶりだされてきて、ロシアを学ぶという営為が、通時的にも共時的にも世界とつながっているのだということとを自分自身痛感させられたからである。これはいわゆるグローバルゼーションとは対蹠的なものである。普遍的なスタンダードに合わせるのではなく、個別的な狭いところを掘ることによって、広い世界が見えてくるという方向だ。

府中キャンパスに移転してから、校舍がきれいになった分、学生がアトム化していく傾向を感じたため、数年前から外語祭のときに「カムチャツカ」というロシア風居酒屋を出すようになった。かつて蟹工船に乗った私の、辺境へという思いもあるが、カムチャツカのもうひとつの意味、劣等生というところが気に入ったのである。場所は決まってブロムナードの最果て。そこにはロシア、中央アジアからの留学生や

本当は優秀な私のゼミ生、OB・OGがたくさん集まってくる。こうした自然発生的な集まりから有機的な人間関係が生まれ、まさにソボルノスチが形成されていくのが、私の夢である。定年前の最後の年に私の講義に一人の素敵な聴講生が現れた。世界的なバイオリニストの前橋汀子さんである。

レニングラード音楽院で学ばれ、その後ジュリアードを経て、スイスを拠点に活躍された彼女は、なんと私が何十年も追跡してきたメーチニコフが晩年をすごしたレマン湖の奥のクララン村のシゲツテイ先生に師事していたのだという。音楽にはまったく不案内な私だが、前橋さんが講義、ゼミに加わったことで、学生たちにもわかに活気づいてきたようだ。コンサート活動と重ならなければ、今年の外語祭の「カムチャツカ」に前橋汀子さんの姿が見られるかもしれない。今年にはロシアが誇るビール、バルチカが用意される予定です。とこんな調子ですから、まだ外語を去る実感が湧かないのでしようね。

ロシアが大きく変わろうとしている今日、学生諸君にはさまざまな分野で活躍の場が広がっているはず。それを信じて辞書を引きましょう。そしてたまには「カムチャツカ」精神を思い出し、羽目はずすだけのスチヒヤを併せ持つて下さい。ロシア会の会員の皆様には、これからも母校の発展のためにご協力をお願いいたします。独立法人になって予算が削られる中、亀山学長も奮闘しておりますので、口

シア会としても多方面で彼を支えていきたいものです。(付記：やり残したライフワークとは、メーチニコフの評伝とメーチニコフがその先駆者の一人とされるユーラシア主義に関する研究書を書き上げることである。)

追悼 新田 實 先生



ロシア会の副会長として毎回懇親会の乾杯の音頭をとっていた。だいたい新田實先生が、昨年十月二十二日、急性心不全でなくなられた。その数日前にいただいたメールには、最新の会報を受け取り、朝妻幸雄氏の記事に対する高評と、亀山新体制への期待、それに体調が許せば、ロシア会およびその前のロシア文学会で会いましょうと書かれていた。大阪戦から戻って、返信を送ったのが、先生がなくなられた当日の朝まだき時間だったから、もしかしたら私が先生との最後の対話者となったのかも知れない。

西ヶ原時代には、本部棟の最上階がロシア語科の研究室で、主任の部屋は別名ハラ・バーといって教授会終了後などには全学の先生方が遅くまで気焔

を上げていた。また金曜日ともなるとゼミを終えたわれわれも鍋を囲むことが多かった。その頃の学生たちは、いくつかの先生方の研究室をハシゴしていたようだ。そんな時、新しいもの好きの新田先生は、コンピュータ占いを持ち出し、場を盛り上げてくれた。また酔って私がよくも考えずに直感で執行部や教育体制の批判をすると、指をパチンと鳴らして「そのとおり!」と同意の声をあげてくれ、つづいて、その理由を論理的に説いてくださったものである。

外語に赴任した直後に心筋梗塞で倒れたことがある先生は、栄養士の奥様に力ロリー制限をされていたが、よく禁を破って大塚あたりで焼肉やキムチを食べたものである。また若い頃いためた頸椎から来る頭痛持ちだった先生は、それを忘れるためにか学内の雑事を進んで引き受けていた。その結果定年を待たずして先生は付属日本語学校長に転進し、そのセンター化と教員の待遇格差の廃止をやつてのけたのだ。またその多忙の中で、和久利誓一先生を支えて、岩波ロシア語辞典の全面改訂をやり遂げたのだ。

読み、書き、話すという語学の三要素を新田先生ほど高度にバランスよく身に付けていた人を私は知らない。またわが国であまり研究されていないかったソビエト社会学に関心を寄せていた先生のゼミからは、多くのすぐれたジャーナリストが輩出したのだ。合掌。

渡辺 雅司

外語の思い出

貝沼一郎(昭和11年卒)



した事とたった一体しかなかった胸像がロシア語部のかつての先生であったことになぜか希望が湧いた。

私は昭和七年(一九三二年)東京外国語学校露西亜語部(以下ロシア語部とする)に入学した。入学試験の成績を見に行く時、止宿先の滝野川の友人の家を出て市電(当時はまだ東京市であった)に乗り神保町で降り、まっすぐ歩くと真向いに皇居のお濠端が見えて濠端から右へ三〇メートル程歩くと「東京外国語学校」と云う立派に浮き彫りされた門があり、入ると低い黒塗りの木造バラックの集まりがあった。門を入って左側のやゝ大きな建物の前に胸像が一体建っていて、それは本校の古いロシア語部の先生、鈴木於菟平氏のものであった。私は東京外語の校舎が低いバラック建であるのにいささか失望したが、私がロシア語部に合格

した事とたった一体しかなかった胸像がロシア語部のかつての先生であったことになぜか希望が湧いた。

入学が決まると寄宿舎の日新学寮に入った。学寮は木造の古い建物で学生五、六人が勉強し生活出来る程の広さを持ったいくつかの部屋に分かれていた。私が入った部屋の学生はロシア語部が四人(四年生が一人、三年生一人、新入生二人)でほかに英語部一人、スペイン語部一人の計六人であった。新入生二人は和久利誓一君と私である。和久利君は机の位置を定めると、書物を並べたが、その中に厚めの岩波文庫本が四、五冊あり米川正夫訳の『戦争と平和』であった。私は和久利君と一緒に寄宿舎の御飯を食べ、よくピンポンなどした。また、夜になると時々「夜なきそば」の屋台を引いたおじさんが我々の学生寮に向って笛を吹き、お腹の空き加減の時を見計らっては屋台を止めた。私達は三々五々寮を出ては「そば」を食べたが、とても美味しかった。その頃はまだアルバイトなどは無くみんな良く勉強した。和久利君は後に母校の教授になり八

杉先生のあとをついで岩波書店の『岩波ロシア語辞典』の編集長になり、私は彼が亡くなる迄交友を続けた。なお、日新学寮には児童文学の作家として有名になった新美南吉君が英語部の学生として同年入寮している。

当時のロシア語部の先生方は八杉貞利教授、松田衛教授、除村吉太郎教授、佐藤勇助教授と外人ではトドロヴィチ先生と画家、版画家として有名だったブブノワ先生が居られた。八杉教授は白髪が少しまじり大変御元氣であられた。授業にはなにか威厳があり学生達は肅然としてお話を聞くのであった。松田教授は一種の風格を持たれ授業にはユーモアの漂う事が多かった。除村教授は勉強家として有名で、授業にはよく遅刻されたが、学生達は先生は昨夜遅く迄勉強されたので今朝は起きられなかったのだらうと別に気にすることもなかった。佐藤助教授はまだお若く新進気鋭の先生であった。また、トドロヴィチ先生が発音を指導された。授業は厳しく正確な発音が得られる迄いつ迄も学生を立たせ、時には鉛筆を学生の口の中に入れたりして学生と我慢比べをされるのであった。外語のロシア語の学生は発音が良いと云う評判があったのもっともらしい。ブブノワ女史は会話を教

各語部が専門の語学で芝居をする語劇も忘れ難い。これは毎年四年生が二学期の半ば頃に外人の先生の指導のもとに演じたもので、楽器や所作ともつく本場物の趣きがあった。一年生の私が最も感服したのは我がロシア語部の、レフ・トルストイの『生ける屍』であり、他の語部ではフランス語部の『シラノ・ド・ベルジュラック』であった。前者はしみりした劇で、話されるロシア語がみんなわかったわけではないが、真面目な良い劇であり、もう一つは劍客ながら醜い鼻を持つ主人公シラノが他人の恋情を他人に替って述べ、やがてそれが自分の真の恋情となる長広舌の、意味はわからず乍ら美しく力のあるものに思えた。

外語の建物は何度も火災に遭い悪かったが、しかし場所が神保町の傍にあり本好きの私にはけっして悪くはなかった。

貝沼一郎氏は日魯漁業勤務を経て、札幌大学外国語学部教授となり、ロシア文学を講じられました。札幌大学名誉教授。主要訳書にアクサーコフ「釣魚雑筆」(岩波文庫)があります。

赴任にあたって

沼野 恭子



この度、二〇〇八年十月より、東京外国語大学ロシア語学科専任の教授として赴任させていただきましたことになりました。

これまで亀山郁夫学長が長年にわたってロシア語学科の文学担当の教授として教鞭をとられてきたわけですが、その後任として着任させていただきます。たくことになり、今はその責任の重さと使命の大きさに圧倒され、不安を覚えているというのが正直なところです。

これから皆様のご助力、ご鞭撻をおおきながら、少しずつ前進していきたいと思っております。何とぞよろしくお願い申し上げます。

とりあえず、こんな毛色の変わつ

た者だということ、自己紹介をさせていた。だきたいと存じます。私は、東京外国語大学ロシア語学科を卒業してから、NHKに入局し、国際局でディレクターとしてロシア語短波放送の業務に携わりました。学生時代からロシア語に関わる仕事をしたという気持ちが強かっただけに、毎日30分の放送枠の中でロシア語のニュースや番組を構成していく仕事は楽しく、充実したものに感じられました。

この時期の貴重な経験といえば、富士山のふもとにある別荘に黒澤明監督を訪ねてインタビューし、監督のロシアへの思いをたっぷり話していただいたことです。また、ネフスキーの評伝を書かれた考古学者の加藤九祚先生、ロシア文学者の新谷敬三郎先生、ゴーゴリ論を書かれた作家の後藤明生氏へのインタビューをもとに番組を作ったことも大切な思い出です。こうした仕事を通じて、私の中でほしいにロシア研究への憧れが膨らんでいきました。

その後、迷ったあげくNHKを辞

めてアメリカに渡り、夫の留学先だったハーバード大学で二年間、日本語教育という新しい分野に身を置きました。でも日本語教育には活路を見いだせず、大学のロシア史の講義を聴いたり、アメリカ人に交じってロシア語会話の授業に出たりして将来の道を模索しました。ここでは、ロシアを日本からだけではなくアメリカから見てみるという相対的な視点を得たように思います。

日本に帰ることになり進退きわまつたわけですが、東京大学大学院に入つて比較文学比較文化を勉強しなおすことにしました。二十世紀初頭のロシアと日本の文化的な関係や軋轢について考えているうちに、ロシアにもジャポニスムがあつたのではないかとこの仮説にたどりつき、それを修論にまとめました。

大学院に在学している間に、ポランドのワルシャワに約一年滞在するというこれまた貴重な機会を得ることもできました。ペレストロイカが始まってまもなくの時期で、ワルシャワ大学もたいへん活気がありましたし、以後、東欧諸国の文化に対する私の関心は揺るぎないものになりました。帰国してからは、現代ロシア文学の変動をリアルタイムで感じながら、その息吹を少しずつ日本に紹介・翻訳するようになります。

これまで、外語大のほか立教大、お茶の水女子大、慶応大、東大、東工大などいろいろな大学で非常勤講師としてロシア語・ロシア文学の授業をおこなってきました。それぞれ大学の特徴があつて比較すると面白いですが、中には、縁あっていまだにロシア語を通じてお付き合いしている「元学生」さんたちもいます。

今年度、外語大で初めて「ロシア文学」の講義を担当させていただきました。外語大の学生はみな後輩です。ですから、それと同時に、外語大の学生さんたちと交流しながら互いに成長していけることを、心から楽しみにしているのです。

これからはロシア語科スタッフの皆様とともに、微力ながらロシア語界の活性化に努めてまいりたいと存じます。

どうぞよろしく願ひいたします。

ロシア・トルクメニスタン旅行記

鈴木 義一

九月四日から二二日まで出張でロシアとトルクメニスタンに行く機会を得た。ロシアでは、グルジアとの紛争開始から一ヶ月という時期で、世論の動向やマスメディアの論調は興味深く、経済面ではアメリカの金融危機の影響がロシアの証券市場や金融システムに影響を及ぼし始めていた。トルクメニスタンでは、駐ア



トルクメニスタン
カラクム運河のほとり

シガバット(アシハバード)日本大使館の臨時代理大使と専門調査員の地田徹朗氏(ロシア語専攻卒業生)から、九月中旬に生じた麻薬組織で当局が制圧したとされる事件も含めて、現地の政治・経済情勢について詳しい説明を受けた。しかし、これらについては別の機会に詳細に論じることとし、ここでは一旅行者の視点からモスクワとアシガバットの印象を記しておきたい。

モスクワでは、物価高と交通渋滞が相変わらずである。朝のテレビ・ニュースの地方版では道路交通情報が提供され、どこでも路肩は駐車車両で埋め尽くされている。また、オフィスビルと高層住宅の建設ラッシュが続いており、不動産バブルが懸念される。「中間層」と富裕層が経済成長の果実を得ていることは、彼らの消費行動によく表れている。

久しぶりにモスクワを訪れて気づいたことの中で、ここでは二つ指摘しておきたい。まず、ソ連末期から一九九〇年代にかけてなおざりにされてきた経済のインフラが徐々に整備されてきている。地下鉄の延長や新駅の建設も進んでいるが、郊外電車(エレクトロリーチカ)の新車両は快適で、パークロードの切符による自動改札も円滑に機能している。とくに、ドモジエードヴォ空港とバヴェレツ駅をつなぐ直通の「エクスプレス」は便利で、一部の航空会社はバヴェレツ駅で搭乗手続きを済ませることができている。

二つ目は、移民労働者が目立つことである。清掃業務や建設労働に従事しているのは、ほとんどがひとりでタジキスタンやキルギスなどから来たと思われる労働者で、聞くところによるとかなり厳しい雇用条件・居住環境にあるらしい。行政は移民

労働力の流入や不法滞在者に目を光らせている。労働市場の二重化という点でEU諸国に似てきた。

トルクメニスタンに旅行ビザで入国するためには、宿泊するホテルの予約だけでなく、たとえ個人旅行で



アシガバット近郊の
トルクメンバシ記念国立博物館

あつても滞在期間中のガイドの手配を事前に行うことが義務付けられている。ガイドは監視役でもあるので、普通には観光をするのであればガイドがいると便利だし、身の安全に神経を使う必要もない。また、入国の段階で厳しく管理しているため、ロシアのように路上で警察がパスポートの提示を求めたりすることもない。不便なのは、ガイドなしの個人旅行者の存在を想定していないため、地図や観光案内の類が貧弱で、観光スポットでも観光客を扱うことに慣れていないことである。

「閉ざされた独裁体制」の現実意外に緩んでおり、「午後は一人体内を散策したい」とガイドに言う

と、市外に出ないこと、政府庁舎を撮影してはいけないことを確認して去っていった。白タクの運転手は、「天然ガス、石油、綿花、塩、これらがたくさんあるのに俺たちが貧しいのは大統領と政府が馬鹿だから」と批判の鋒が収まらない。

現在のアシガバットは、巨大建造物と噴水の街である。ムスリム風のコンクリート建造物である政府庁舎と「ルースキー・バザール」などの低層の商業区や旧来の居住地域が入り交じった中心部を離れ、街の南の広大な地域にビジネス・センタールと高層マンションが続々と建設されて



アザティエー広場(旧カール・マルクス広場)の「中立の塔」と噴水

いる。天然ガス輸出により得た資金が投入されているのは明らかで、商業ビルと噴水は夜になるとライトアップされ、七色に輝いている。腰を落ち着けて住んでみると、いろいろの意味で興味の尽きない街であると思う。

(教授・ロシア経済史)

イギリス、ロシアに留学して

門馬 千尋

2007年10月
ロンドン

平成十九年十月から休学し、イギリス・リーズ大学の語学センターと、ロシア・モスクワ大学のCIEE(II MO)へ語学留学をしました。このようなプランを実現できたのは、神戸市立外国語大学のヴァレリー・チャスヌイフ先生のお陰です。リーズへは十週間、モスクワへは六ヶ月です。この留学についてご紹介したいと思います。

ヴァレリー先生に色々とお話を聞いていただいて、五月頃から個人的に手続きを進めていきました。前日までリーズでの寮や到着後の手続きについての連絡が来ず、催促を繰り返した末にやっと寮が決まったという連絡が来たのは出発十時間前でした。自分の責任で、しかも英語で手続きを進めるなど初めてのことで、緊張しました。また、モスクワ行きに関しても招待状が来ないなどスムーズにはいきませんでした。今思えば良い経験です。

リーズに到着し、最初に戸惑うこともありませんでしたが、カルチャーショックを楽しみました。欧米の学生たちは放課後を毎日派手に過ごしているかと思いきや、試験前には図書館にこもりきりで本に囲まれて勉強している。ある意味めりはりがついているというのか……日本の学生(自分の周りの)とは違うと感じました。日本のはとはまた違う楽しい学生生活を体験できたのは大変貴重でした。また一方で授業に関して色々問題もありましたが、そういったことにも直面して少しは大人になれたかと思えます。イギリスではホームシックにもかからず、自由で楽しかったという印象が一番強かったです。



2007年10月 リーズ

一月十四日、初めてのモスクワに到着しました。リーズに着いたときとは少し違い、わくわくしました。



2008年5月 モスクワ

久しぶりのロシア語、初めて見るモスクワの街。留学というより冒険に近い感覚でした。

私の微々たるロシア語能力では右も左も分りませんでしたが、友人の助けを借りながらなんとか最初の数日を過ごしました。初めて学校に行つた日、名前を訊かれたのを *Katya* (カタヤ) だと思つて *Xopolino* と答えてしまった時はこの先どうなることかと思いました。しかし私のクラスの先生はスバルタで、日本に居たときの倍は頑張つたような気がします。休みの日には学生券でボリシヨイ劇場に行くなど、勉強以外にも見るところが多くて忙しかったです。また、リーズでは日本人を含めて学生としか交流していませんでしたが、モスクワでは日本の社会人の方々と一緒に過ごす機会が多く、違った面白さがありました。

ありました。土日と休日を利用して旅行もしました。『黄金の環』も巡り、ムールマンスクにも行ってきました。少し足を延ばしてグルジアとアルメニア、またポーランドとウクライナでは初めての一人旅に挑戦しました。特に一人旅には不安を覚えていましたが、新鮮な出来事が一杯で、非常に楽しい体験となりました。

ロシアでは勉強にも励み、観光や旅行もして楽しい日々でした。一方で、嫌がらせを受けたこともあったし、自分のロシア語のできなさに歯がゆい思いをしたこともありませす。しかし、ロシア語を勉強していなければ体験できなかった貴重な出来事もたくさんありました。イギリスではロシアほど困ったことは多くありませんでしたが、様々な国の人々と知り合うことができ、多くの価値観にふれることができたことは、私に少なからず影響を及ぼしました。両方の留学を通じて、自分がいかに今まで恵まれた環境で過ごしてきたかということに気づき、知らない土地で知らない言葉に囲まれて過ごすことと度胸と我慢強さが多少身についたと思います。今回留学させてくれた両親や、応援してくれた友人の大切さにも気づけたことも大きく、留学して本当によかったと思います。

(ロシア語専攻三年)

初めての演劇 ：『鼻』をつくる

杉 香苗

演劇経験もなく、ロシア語ができるというわけでもない私が、突然ロシア語劇の演出という重大な役をやるうと思いついた原因は、浦雅春氏の『ゴゴリ新訳』だった。この『鼻』に魅了された私は、「これを劇にしてみたい！」という単純な気持ちだけで演出に立候補した。幸か不幸か、他に演出に立候補した人はおらず、二〇〇七年のロシア語劇は私が演出を務めることが決まった。

最初にぶち当たった壁は小説の戯曲化であった。とりあえず原作から「」で括られた会話文を抜き出してみた。『鼻』は会話文の多い小説ではあったものの、それだけでは明らかに足りない。

どうしようかと悩んでいる時に、シヨスタコーヴィッチ作曲のオペラ『鼻』があることを知った。ロシア語のオペラ脚本は見つからなかったが、英語版を手に入れることができ、それを元に語劇の脚本の下地を作っていた。

脚本作りは思うように進まず、夏休みが終わるころになってようやく完成した。他の専攻語に比べると大幅な遅れだった。

10月からいよいよ稽古を始めるこ

とになったものの、別段お芝居に親しんでいたわけでもない私は、演出として何をしたらいいのかわからなかった。

そこで助けになったのが、またしてもオペラ『鼻』だった。前半までではあったが亀山郁夫先生に映像をお借りして、役者と共有した。演劇初心者の方にとつて、大変役に立った。前半の雰囲気参考に、後半の演出は自分たちで作っていくことができた。また音源を入手することができたので、語劇でつかう音響もすべてオペラから引用した。これは本番のアンケートでも好評だった。

また、10月に稽古を進めるにあたって、夏休み前にできていた部分の台詞を大半の役者が覚えてくれていたことはありがたかった。なかでも最も台詞の多い主人公のゴリヨフ役の小淵大輔君は大変な労であったと思う。

演出は、その場にいる役者や演出補佐と一緒に考えていった。試行錯誤の末に「これだ！」と思える演出にたどり着けると嬉しかった。お芝居素人の私が演出を務める練習は、演出が決まらず思うように進まなかったが、練習回数を重ねるにつれて役者自身が自分たちで演技を考え、動いていけるようになった。

やはりスタートが遅かったせいか、本番直前まで演技や演出、照明の見直しが続いた。しかし最後まで諦めずに粘って練習をしていたことが、本番でもプラスになったと思う。朝・

昼・夕と毎日練習に付き合ってくれた役者やスタッフに感謝したい。

いよいよ本番当日。夕方から始まる本番に備えて、午前中も練習していた。最後までうまくいくのかどうかという不安が消えなかった。

そして公演。舞台裏で照明・音響と連絡を取りつつ、舞台を見守った。一時間強の公演の間中、ずっと緊張が続いていた。失敗もあったものの、なんとか公演が終わり、緊張が解けると同時に大きな充実感を得ることができた。

今 改めて語劇の映像を見返すと、「ここをこうしたほうがよかった」「ああすればよかった」などというのを考えてしまう。演出としての役割を十分に果たせなかったことが申し訳なく、また悔しくも思う。しかし語劇に関われたことは本当に良い経験だった。公演後の達成感には、それまでの苦しかったことをすべて忘れさせてくれた。多くの仲間と一つの作品を作り上げる喜びを感じる事ができたし、何よりも楽しかった。公演が終わるまで不安が絶えず、そのときは気づかなかつたが、今思い返せば役者・スタッフにずっと支えられて本番までやってこれたということがわかる。

たくさんの迷惑をかけてしまったが、私のわがままに最後まで付き合ってくれた演出補佐や制作をはじめ、役者・スタッフに、また指導や協力をしてくださった多くの先生方にこの場を借りて感謝します。

(二〇〇七年度ロシア語劇 演出)

キャスト

ゴリヨフ

小淵 大輔

鼻

伊藤 洋

床屋の妻

高田 祥子

床屋

宮本 康平

イワン

大石 千恵子

巡査

伊田 優志

御者

笹山 啓

新聞社の係員

三橋 あゆみ

医者

小西 恵美

伯爵夫人

魚谷 和美

伯爵夫人の召使

高橋 佳奈

婦人

内田 あゆみ

乗客

田中 万智

ポドトチナ婦人

田中 桂

ポドトチナ婦人の娘

安部 勇次

見張り人

大橋 和弘

通行人

荒木 泰介

門番

佐藤 嵩道

警官

佐藤 和日子

ゴゴリ

横原 雄貴

スタッフ

杉 香苗

演出

杉 香苗

演出補

笹山 啓

音響

大石 千恵子

字幕

岩崎 真理子

照明

松井 真雪

衣装

田井 将輝

制作

岩坪 玲加

プロデューサー

大石 寛子

指導

田中 桂

濱野 滝川
アール 先生

府中だより

鈴木 義一

まずは恒例のイベントの報告から。昨年十一月九日に「ロシア語週間」のセミナーを実施した。ゲストのM・ナハービナ教授の講演「外国語としてのロシア語教授法の新しいアプローチ」に続き、神戸市外国語大学客員講師(当時・現在はモスクワ大学国際ロシア語教育センター講師)のV・チャスヌイーフ氏が、「日本人にロシア語を教えた経験から」と題して、実践的なプレゼンテーションを行った。

続いて第二部の「文学音楽サロン：銀の時代の詩人たち」では、L・リュトビンスキー氏が、A・ブローク、M・ツヴェターエヴァ、S・エセーニンなどの作品の朗読とパフォーマンスを行った。ここで学生サークル「ルムーク」が披露したロシア民謡の合唱に、リュトビンスキー氏が感激していた。

やはり恒例の「中野健三基金シンポジウム」は、十一月二七日に「甦るドストエフスキー」というテーマで開催された。講演は亀山郁夫学長司会と討論が渡辺雅司教授であった。講演では、『ドストエフスキー：謎と力』(文春新書)や『カラマーゾフの兄弟』続編を空想する(光文

社新書)の内容に触れつつ、ドストエフスキーの魅力が語られ、続いて参加者との質疑応答があった。

近年、受験生・高校生を対象にしたイベントが恒例となってきた。「オーブンキャンパス」は毎年十一月の外語祭期間中と夏休み前の二回行われており、体験授業や専攻語ごとの相談コーナー、留学情報、「在学生に聞いてみよう!」の相談コーナーなどいづれも盛況である。首都圏の高校生・受験生はもとより、本学のオーブンキャンパスのために上京してくる親子連れも多い。

高校生・受験生を対象としたものとしてはさらに、「体験授業」と「出前授業」を実施している。前者は今年の四月以降すでに札幌(五月八日)、名古屋(六月二日)、福岡(七月三日)の三会場で開催した。これは拠点となる大都市の会議場などで、一〇〇名前後の参加者を事前に募って開催するもので、いづれも二名の教員による体験授業に続いて、入試にかんする説明と質疑応答をするという内容である。ちなみに、今年には私自身も札幌で体験授業をやっ

た。「出前授業」とは、あらかじめ授業プログラムを公開し、高校から申し込みがあると担当教員が出向いて講義を行うというものである。今年度は、フランス語、アラビア語、カンボジア語など九つのプログラムが用意されており、すでに七つの高校で実施され、さらに今後六つの授業を行う予定となっている。

こうしたイベントは、私立大学では十年以上前から実施されているものだが、今や国立大学でもあたりまえとなった。その背景には、当然のことながら「大学全入時代」の到来がある。幸い外語大は定員割れの心配はないが、「優秀な学生」を多く集めるには相応の努力が求められる競争環境にある。「優秀な学生」とはさしあたり、高校の教科をしっかりと勉強し、外国語とそれに関連する地域について一定の問題意識を持っていることであろう。彼らが受験勉強に励んでいた八月に、ロシアとグルジアの軍事紛争が起こった。こうした事件のあった年は、かなり明確な問題関心をもってロシア語を選択する受験生がいるもので、実は密かにそれを期待している。
(教授・ロシア経済史)

二〇〇七年度
ロシア会総会・懇親会報告

二〇〇七年十一月二四日(土)、折から、開催中の外語祭で賑わう府中キャンパスでロシア会総会・懇親会が開かれました。

総会は研究講義棟一〇八教室で、その前月十月に急逝された、ロシア会副会長でもあられた新田實先生のご冥福を祈る黙祷が始まりました。

会務報告は会計の報告、会計監査の報告、いづれも報告のあと承認されました。ロシア会会報についての報告がありました。

一九九七年四月に発足した東京外語会『同窓百年史』編纂委員会にはロシア科同窓からも原稿が寄せられておりました。これは素材稿として編纂作業に利用させて頂くものでそのまま掲載されるものではなかった。『同窓百年史』刊行の時には、記念文集として発行することになっておりました。(一九九九年十一月ロシア会で提案、承認。)ところが、編纂委員長が病気で倒れたことなどから東京外語会は二〇〇五年九月『同窓百年史』編纂刊行の中止を決定しました。貴重な個人の記録とも言うべき文章をそのままにしておくのは、申し訳ないとの声が編纂事業に協力した人から上がり、編纂委員の一人で
(次ページ四段目につづく)

会計から

ロシア会の会費は、外語会の会費とは別立てになっており、つぎの通りです。

終身会費 三万円(振込料 窓口三三〇円、ATM二九〇円) または
年会費 一千元(振込料 窓口二二〇円、ATM八〇円)

納入頂いた状況は左表の通りで、終身会費を一括して納入された方が二名増加しました。収入合計で前年比五万余円の増収となりました。支出は、会報の作成と郵送に関する費用が七万円余増加したほか、講演会費が六万円発生しました。一方、卒業生の懇親会へ

東京外語ロシア会2007年度収支

(2007年4月1日～2008年3月31日 単位 円、監査実施済)

1 収入	終身会費 (10名、単価3万円)	300,000
	年会費 (延べ70名、単価2千円)	140,000
	郵貯利息	5,831
	合計	445,831
注: 年会費には5千,1万円納入者あり		
2 支出	会報制作費 (印刷製本作業代)	227,928
	会報宛名ラベル (支払先:外語会)	21,700
	会報郵送費	167,003
	霊園管理料 (ミチューリン先生お墓)	3,420
	郵便振替票の印字費 (会費納入用)	2,200
	会議費 (07年7月26日)	4,300
	講演会謝礼 (計4回、外語百年史12冊)	60,000
	払込手数料3件	980
	雑費 (佐川急便)	892
	懇親会への補助	201,533
	合計	689,956
3 差引計算及び繰越金		
	差引剰余金	▲244,125
	前期繰越金	3,600,672
	次期繰越金	3,356,547

ロシア会懇親会収支 (2007年11月24日実施、単位 円)

1 収入	出席者会費 (卒業生75名 単価5千円)	375,000
	寄付金(井上 勝氏)	5,000
	本会計からの補助	201,533
	合計	581,533
2 支出	料理代 (外語大生協)	500,000
	飲物代 (大久保商店)	65,313
	花束代 (亀山学長、タマーラ原先生)	10,500
	ネームプレート・ホルダー50ヶ	4,700
	払込手数料 (2件)	1,020
	合計	581,533

二〇〇七年度 終身会費納入者

(三万円一括納入された方、および分納額の累計が三万円に達した方)のお名前。(送金到着順、敬称略)
真田栄子、月橋信治、伊藤正修、武藤厚広、矢澤亜矢子、内海宏章、駒井健太郎、駒井裕美子、大森浩子、山岸研、渡邊雅子、三木朝子。

ロシア会会計 大浩義之
河野靖夫 計十二名

(追伸) 会報送付の封筒の宛名頭部に〇印のある方は終身会費納入済みの方で払込票は同封してありません。

(前ページ四段目からつづく)
あった町田から記念文集の作成をロシア会として認め、応援していただいたいと述べ、ご異議はありませんでした。渡辺雅司先生が会長としてこの一年について話されました。

懇親会 今回は九月に学長に就任された亀山郁夫先生をお祝いする会でもありました。まず、先生のご挨拶、抱負を語られ、同窓の応援、協力を、と話されました。また、長年ロシア語の作文・会話を担当なさった、タマーラ・原先生がこの年定年退職されるので、挨拶をされ、お二人に花束の贈呈がありました。

あちこちで懇談の輪が出来、在学生のロシア民謡サークルの歌に合わせ歌い、次の年には一橋の大学院に進学というお嬢さんのベリ・ダンスがあったり、古い卒業生には隔世の感がありました。そのうち、「亀山 歌え」という渡辺先生の声に促されて、亀山先生が「エヴゲーニー・オネーギン」からオネーギンの詠唱を歌われ、友人はだしのバリトンにびっくりしました。大学院生の頃、他の大学の学生も一緒のコンサートというグループでオペラ「エヴゲーニー・オネーギン」を上演なさったそうで、その時ピアノを弾いたのが沼野恭子先生とのこと。NHKラジオのロシア語講座担当の鴻野わか菜先生など若い方々も沢山いらして、頼もしく、楽しい懇親会でした。

二〇〇八年度

ロシア会総会・懇親会のお知らせ

今年度のロシア会総会・懇親会を左記により開催します。ロシア会会長渡辺雅司先生の東外大教授現役最後の年となります。多数の方々のご参集をお待ちしています。

日 時 11月23日(日)

午後一時から総会

三時から懇親会

総会終了から懇親会が始まるまでの間、小一時間ほどの時間があります。当日は外語祭の期間中です。どうか、在学生たちのイベントや模擬店をお楽しみください。

総 会 府中キャンパス研究講義棟一〇七教室

会務報告など

講 演 「日本ブームの再来と現代ロシア文化」

沼野 恭子氏

今秋亀山郁夫先生の後任として着任された(四頁をご覧ください)沼野先生の講演です。

懇 親 会 三時から 大学会館一階食堂で

会 費 五千元(卒業生)

ロシア語劇は11月24日(月)午後四時三十分〜六時五分
プーシキン作「スベードの女王」です。(同封チラシの有志による語劇と二作品が今年の外語祭では上演されます)

ロシア語専攻

専任スタッフの紹介

すでに書いたように、亀山郁夫教授が学長に転進したことで、渡辺が来春定年退官となることに伴って、ロシア語専攻のスタッフは大きく変わります。とりあえずここでは現時点での教授陣を紹介いたします。

高橋清治教授 専攻代表

ロシアにおける民族問題(とりわけ今話題のグルジアが専門)

中澤英彦教授

ロシア語学、ウクライナ語学

鈴木義一教授

ロシア経済史

沼野恭子教授

ロシア現代文学

匹田 剛准教授

ロシア語学

ガリーナ滝川・ニキパレツ客員准教授

ロシア語会話、ロシア言語社会学

渡邊雅司教授

ロシア思想史、日露交渉史

これ以外に、非常勤講師として、エレオノーラ・サブリーナ、東井ナゲージュダ、浜野アーラ、村田真一、前田和泉、八島雅彦、古賀義頭、加藤栄一、鴻野わか菜、望月哲男、小林潔、中嶋毅、広岡直子の諸先生がそれぞれの専門で教えておられます。

(文責：渡邊雅司)

編集後記

ロシア会会報11号をお届けします。今回から復刊という文字をつけるのはやめになりました。復刊1号は一九九八年十月二五日発行、その前年に東郷正延先生の卒寿のお祝いをし、ロシア会再興のきっかけになったのでした。それから十一年、内外ともに実に多くの事件、変化がありました。外語に限って言っても、百周年記念事業、西ヶ原から府中へのキャンパス移転、国立大学の独立法人化等々がありました。

今年度が東外大での現役最後と仰る渡辺雅司先生に、23年の外語での研究者としての、教師としての生活を振り返って書かれた文章を巻頭言にいただきました。

貝沼一郎先生からは七十年以上前の露語科教授の方々、学生生活、語劇などの貴重な思い出を綴った文章をお寄せいただきました。

沼野恭子先生からは自己紹介をかねた着任のご挨拶の文章をいただきました。

鈴木義一先生の旅行記はお帰りになったばかりのところを、お願いしたものです。

六頁と七頁は在学生のページです。昨年の語劇『鼻』はとても素晴らしかった、そのことが杉さんの文章から想像されると思います。

(昭34卒 町田裕子)